MAPPS press

News Letter from MAPPS
2020.02
No.14

頑張れ、ミュージアム。

発行元：早稲田システム開発 株式会社
東京都新宿区高田馬場4丁目40番17号
TEL.03-6457-8585　FAX.03-6279-3333
www.waseda.co.jp/

waseda System Development

CONTENTS

ミュージアムIT屋さん、現場を往く！
SNSで話題沸騰！ 博物館の「飲食禁止」の張り紙

ミュージアムリサーチャー
純粋な想いが支える「ビエンナーレ」 山口県宇部市の取り組み

ミュージアムITトピック
地元局のアナの朗読を配信！ 中原中也記念館

新機能情報
閲覧者限定公開機能

参加報告
岡山県博物館協議会 令和元年度 第1回研修会

ミュージアムIT屋さん 現場を往く

SNSで話題沸騰！ 博物館の「飲食禁止」の張り紙

埼玉県立 歴史と民俗の博物館

少し前の話ですが、SNSで注目を浴びたとある「貼り紙」をご存知ですか？　埼玉県立歴史と民俗の博物館が、携帯電話やフラッシュ撮影などに関する注意書きとともに貼り出した、「展示室が飲食不可の理由」についての解説。右下の画像を見ると、こんな説明が。

わずかな飲み物や食べ物からカビが発生したり、アリやゴキブリなどの虫を呼び寄せてしまいます。飲み物の1滴が虫を呼び、資料の破損につながる危険があります！

博物館では、こまめに確認・点検・清掃を行っていますが、より確実に大切な資料をカビや悪い虫から守るために、御協力をお願いいたします。

この説明に、多くのネットユーザーたちがとても好意的な反応を示しました。理由が分かれば納得してルールを守れる。来館者の気持ちに立って書かれている。とても丁寧な仕事だと思う…と、たくさんの賞賛が集まりました。

一方、「そんなことまで言われなければ分からない世の中になったのか」と嘆く声も多数。確かに、以前なら「飲食禁止」で済んでいたようにも思いますが、素直に守ろうとする人だけではないと考えることも、いわゆる多様化社会のひとコマなのでしょう。

ならぬことはならぬものです、郷に入っては郷に従え。メディアなどでよく耳にする「多様な考え」とは、こうしたかつての常識や共通認識が「共通ではなくなる」ことを意味しているのかもしれません。館内ルールを明示すれば問題ないとは思うけれども、それでは不十分と思う人のために、思慮を働かせることが必要。そんな解釈も成り立ちます。

これもまた、新しい時代に即した「日本ならではのおもてなし」の形でしょうか。いずれじっくりと考えてみたい話題でした。

ミュージアムリサーチャー

純粋な想いに支えられ、地元の景観を創り続ける「ビエンナーレ」

山口県宇部市の取り組み

気持ちのいい秋晴れの一日。広々とした公園で、湖からの風を頬に感じながら作品を眺めていると、そのまま時間の経過を忘れそうになります。自然の中で見るアートは、こんなに気持ちのいいものだったのか。ふと、そんな感動が込み上げてきます。

今回ご紹介するのは、山口県宇部市ときわ公園で開催されている「第28回UBEビエンナーレ（現代日本彫刻展）」です。写真を撮りすぎてここには掲載しきれませんので、厳選して紹介します。心地良さが少しでも伝われば と思いますので、ぜひご覧ください。

ビエンナーレとは、隔年開催の美術展を指します。今回は「第28回」（通算では30回目）ですので、芸術祭としての実績は、優に半世紀を超えている計算になります。というわけで、まずはその歴史を簡単に辿ってみましょう。

山口県宇部市は、明治以降、石炭産業で栄えた街。戦災で市街地の大半を失いますが、戦後の石炭特需もあって見事に復興します。その一方で、煤煙や煤塵による大気汚染も急速に進み、外に干した洗濯物が真っ黒になるほどの「公害の街」に。同時に治安の悪化も進行していたため、宇部の人々は立ち上がります。

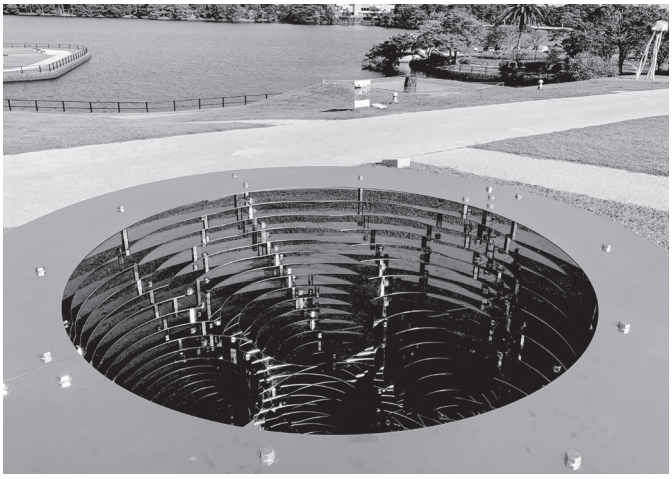
産・官・学・民のすべてが一体となって緑化運動を展開し、婦人会や商工会議所では育った樹木のそばにさらに花を植える「花いっぱい運動」も活発に。こうした盛り上がりから、街に「彫刻を置こう」という気運が生まれます。戦後間もない時代でしたが、彫刻を前に写真を撮ったりスケッチを楽し

んだりする人が徐々に増え、地域に希望が芽ばえます。

街角に芸術作品を置けば、
きっと素晴らしい街になる。

そう信じる人々の思いは、やがて市を動かします。市長と図書館長は、美術評論家の土方定一氏、建築家の大高正人氏、彫刻家の柳原義達氏や向井良吉氏らに働きかけ、1961年7月に「第1回宇部市野外彫刻展」が実現しました。これが、現在の「UBEビエンナーレ」のルーツとなったわけです。

当時の宇部市民の思いは、作品として



残っています。写真の「宇部産業祈念像」は、1956年に設置されたもの。市民の募金で制作されたこの彫刻は、戦後復興のシンボルとして、長く市民を勇気づけてきました。

時代が進み、1980年代に入ると、現代日本彫刻展でときわ公園に展示された作品を街頭に設置していこうという方針が打ち出されます。この作品もそのひとつですが、ひとつ、またひとつと増えていくことで、「何気ない場所に彫刻が点在する」街づくりが進められていきました。市民意識にもしっかり根付き、民間団体や企業が彫刻作品を寄贈しては街なかに設置されるという光景が当たり前になったのです。

現在、市内を彩る野外彫刻は、実に約200点を数えます。宇部は「公害の街」から脱却し、「芸術の街」へと発展していったわけですね。

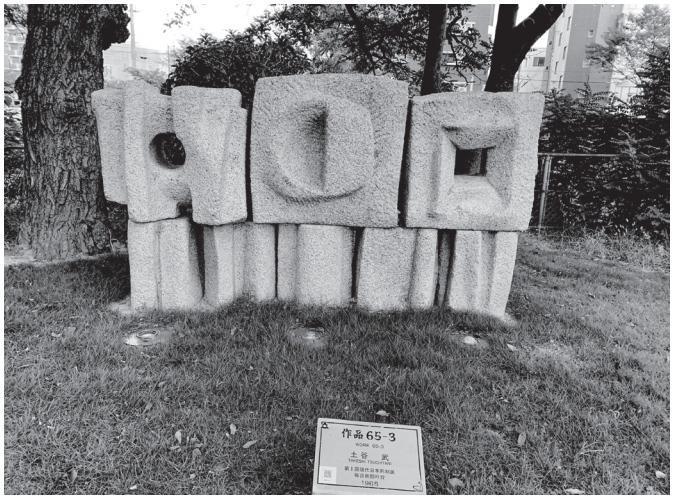
そんな歴史にひとしきり感心したら、さっそく彫刻ウォーキングへ。夕方から日没までのわずかな時間でしたが、宇部市中心部の真締川周辺と宇部新川駅の間を歩いてみました。

どうです、なかなか絵になる光景ばかりでしょう？　もっと撮影にこだわれば素晴らしい写真が撮れそうな風景のオンパレードなんですよ。

ひとくちに彫刻作品と言っても、伝統的な人物の彫刻もあれば、モダンなオブジェもあります。場所もさまざまで、川沿いにあり、交差点にあり、市役所前や駅前でも独特な風景が楽しめますね。だからと言って街の雰囲気から浮き上がることなく、それぞれにしっかり溶け込んでいるのがポイント。この「馴染んだ感じ」は、彫刻がある風景が日常になるまで継続してきたからこそのものなのでしょう。

第１回から開催から「２年に一度」が30回も続いてきたわけですから、その間に代替わりもあったことでしょう。現に、元号は２度変わり、市長も７人目を数えるそうです。半世紀の間には、景気の大波小波があれば、それこそ悲喜こもごもの「歴史に残る事件」が起こってきたはず。それでも変わることなく、何百年も続く祭のように、市民から市民へとバトンを渡しながら続けてきた芸術祭。本当に頭が下がります。

「宇部を彫刻の街に」「アートのチカラでステキな街に」という強く純粋な想いを地域住民が共有し、作家に対して発表の場を提供する。完成した作品はそのまま地域に還元され、文字通りのランドマーク＝大切なワンシーンを創り上げる街の重要なパーツとなり、長く地元で生き続ける…。UBEビエンナーレは、地域の芸術祭として、まさに理想的な姿で運営されていると言ってよいでしょう。



今でこそ「芸術を活用した地域づくり」という言葉は珍しくありませんが、本当に地域を愛する住民たちが力を合わせて本気で取り組むと、ここまで素晴らしい結果を生むのですね。街を歩くうちに、尽力された宇部市の方々に心からの拍手を贈りたい気分になりました。そして、次回こそは、街を彩る全作品を鑑賞するつもりで時間にゆとりを持って訪れようと心に誓うのでした。

UBEビエンナーレ
https://ubebiennale.com/

ミュージアムITトピック

地元局アナウンサーによる「プロの朗読」が話題！

中原中也記念館の試み

**その手があったか！
思わず膝を打つ
収録アイデア**

全国約60館で導入されているミュージアム展示ガイドアプリ「ポケット学芸員」では、館の特性に合った多様な利用方法が展開されるようになりました。今回はそのうちのひとつ、中原中也記念館の取り組みを紹介します。

中原中也と言えば、詩集『山羊の歌』『在りし日の歌』や、「汚れつちまつた悲しみに」で始まる詩があまりにも有名ですね。この日本を代表する詩人の一人の生家跡に建つ中原中也記念館では、中也本人の手による草稿や手紙、日記といった貴重な資料が多数展示されています。

文学ファンの聖地のひとつで、「ポケット学芸員」がどう役立っているのか。もうピンと来ましたよね。そう、音声ガイドで「詩の朗読」が配信されているのです。

ミュージアムで親しむ詩と言えば、直筆原稿のほかではパネルに掲出されているシーンが思い浮かびます。いずれにしても、鑑賞者は「自ら読む」スタイルが多いですよね。一方、「ポケット学芸員」を含む音声ガイドサービスは、当然のことながら展示についての解説を配信するツールという意識があります。

詩人を顕彰するミュージアムであるならば、詩は作品そのものであるはず。よって、詩の朗読を音声ガイドで配信するということは、「作品を耳で鑑賞する」ことになる…。こう聞くと「なるほどね」と納得しますが、これがかなり新鮮な展示になり得るのです。

朗読担当は、地元局の現役アナ！

ポイントは、朗読のクオリティ。読み手が上手であればあるほど、「ひとつの作品」に近づきます。そこで中原中也記念館では、何とテレビ山口で活躍されている後藤心平アナウンサーに朗読を依頼。実際に聴くと、穏やかで、ゆったりとしていて、言葉の間に絶妙の間があって…。まるで「こう読むと中也の世界観が味わえますよ」というお手本のよう。さすがはプロ、期待通りの出来栄え。

となると、ご予算もプロ水準…と思いきや、テレビ山口の厚意でスタジオでの録音作業まで協力を仰ぐことができたとのことので、二重の驚き。その背景には、朗読イベントを開催したり、館長自らが朗読教室に参加したりと、館の日頃の「朗読への取り組み」がありました。こうして、事実上「予算ゼロ」で、「最高品質のコンテンツ」が出来上がったのです。

工夫次第で予算をかけずに

ご存知の通り、I.B.MUSEUM SaaSの機能の一部である「ポケット学芸員」は、ご利用館であれば導入費用・運用費用ともにゼロ。そして、そこで配信するコンテンツも、工夫次第で高品質なものを予算をかけずに作ることができるわけです。今回の事例は、文学系の施設であれば、そのまま実施可能な条件が揃う館も少なくないはず。チャレンジの価値あり、ですよ。

中原中也記念館
http://www.chuyakan.jp/

I.B.MUSEUM SaaS　新機能情報

第三者に画像データ提供が、グッとカンタンに！
閲覧限定公開機能

ほかにも多数の追加機能アリ！

所蔵資料の画像や各種データを外部に提供する際には、どんな手順を踏むでしょう？これまでは「システムから画像をダウンロードし、メールソフトを開いて新規・返信の本文を書き、画像を添付して送信ボタンをクリック」というプロセスが一般的な方法でした。

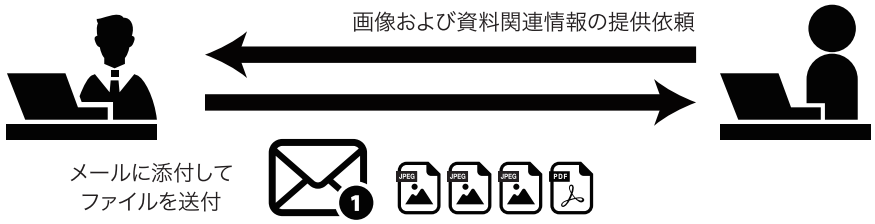
画像はいったんどこかに保存。それ以外の情報は、システムからExcelなどで出力し、それを保存。こうした準備も含めば、場合によっては意外に面倒な作業と言えるでしょう。

そこで、公開ページにIDとパスワードを設定する「閲覧限定公開機能」を用意。画像貸し出し手順を時短化可能な新機能です。

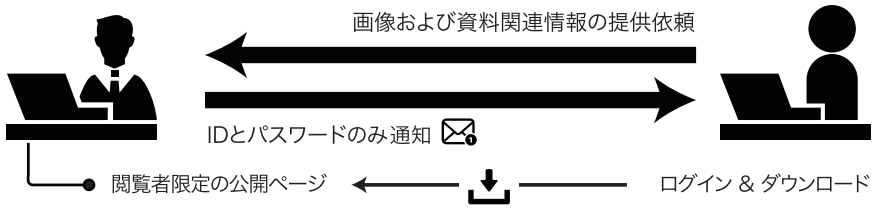
使い方は簡単です。まず、画像を提供したい資料の詳細ページで、画像ダウンロードボタンをONに設定。画像を提供する相手には、この公開ページに案内してダウンロードしてもらうだけです。この時、すでにデータベースを公開している場合はシステムで設定可能な「2つ目の公開ページ」を用意し、対象資料だけを公開し、画像ダウンロードボタンをオンにすればOK。また、対象資料のデータを一般向けには一切公開せず、画像を提供する相手にだけ開示したい場合は、公開ページそのものにIDとパスワードを発行し、対象者に知らせます。

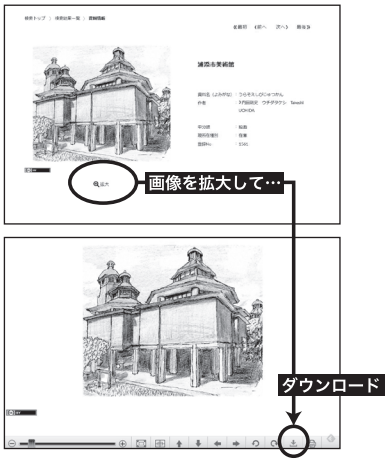
この機能では、期間を設定することもできます。画像ダウンロードの必要がなくなったら、または一定の時間が経過したら、インターネット公開画面設定で「データ公開」をOFFにするだけで、公開ページ自体を閉鎖することができます。

● これまでは…

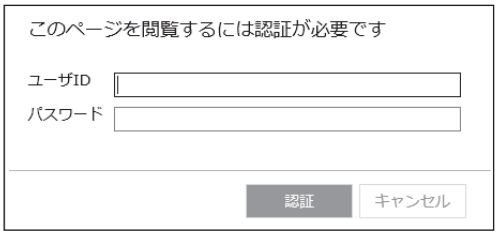


● これからは…





メールの送受信では、添付ファイルに容量制限がある場合も少なくないので、特に複数の画像を提供する際にはとても有効な手段となるでしょう。社内アーカイブであれば関係部署限定でデータを共有したり、博物館が役所に地域写真データを提供する際には庁内限定で公開したり…といった用途にも最適。ぜひお試しください。



公開ページへのログインはお馴染みの画面で

I.B.MUSEUM　SaaSでは、2019年12月に多数の機能追加を実施しました。閲覧限定公開機能もそのひとつで、ほかにも便利な機能がございます。詳しくは下記をご確認ください。なお、**閲覧にはIDとパスワードが必要**ですので、お持ちでない場合は弊社までお問い合わせください。

特設サイト内 新機能の手引
https://welcome.mapps.ne.jp/manual

お知らせ

参加報告
岡山県博物館協議会 令和元年度 第1回研修会

昨年10月末、岡山県津山市は津山洋学資料館にて開催された「岡山県博物館協議会 令和元年度 第1回研修会」に参加させていただきました。今回は、畏れ多くも講師としての参加。さらにテーマがインバウンドとあって、専門外の分野をどこまでお話しできるか、不安いっぱいの一日でした。

契機となったのは、前月に発行した『博物館の多言語アプリ導入＆活用調査報告』でした。インバウンド対応に関するご相談の増加を受けて制作した冊子で、各地の取り組み現場を実際に訪問してのレポートが中心ということで、これ踏まえた事例報告中心の講演とさせていただきました。

研究発表ではなく、サービスのプレゼンでもない、比較的珍しい形での登壇。とても和やかな空気だったことにも助けられ、意外にリラックスしてお話することができました。

ある程度のコミュニケーションならSNSでも事足りてしまうIT社会の現代ですが、足を運んでその土地の空気に触れると、印象がまるで違うものです。実際に訪れた津山の街は豊かな自然や歴史的景観に恵まれ、とても心地よい時間を過ごすことができました。懇親会の二次会で訪れたお店では、地元の常連さん方の姿も多数。津山は「肉文化」が盛んということで、地元の名産品・干し肉を出張土産に購入しましたが、これも聞きしに勝る味わい。お陰様で、初めての津山を満喫する一日となりました。

この場をお借りいたしまして、関係者の皆様に改めて御礼を申し上げます。正直なところ、研修会ではきちんと役目を果たせたのか自信がありませんが、またお目にかかる機会を楽しみにいたしております。（内田）

編・集・後・記

www.facebook.com/wasedasys
早稲田システム開発株式会社

「2020年」なんて、SF小説にしか登場しない架空の世界じゃないか…。子どものころは実感できないほどの未来のように感じていたものですが、それが現実になってしまいました。そう言えば、「腕時計に向かって喋る」のも、スパイ映画の主人公か、戦隊モノのヒーローか。人類の英知、技術の進歩には、ただただ驚くばかりです。

ここからの10年は、AIの時代となるのでしょうか。目を離せない重要トピック続きとなることは間違いない情勢ですが、その一方で、ミュージアムはそんな時代とは対極的、対照的な存在のようにも映ります。

創設者の想い、学芸員の想い。資料への想い、来館者への想い、そして次代への想い。改めて館の周辺を見渡してみると、そこには意外なほど「人の想い」に溢れています。最近はよく「AIに代替されそうな職業や分野」が話題になりますが、人を動かすのは心だとすれば、学芸員を中心とした専門集団であるミュージアムは、逆にその必要性を際立たせていくことになるかもしれません。

問題は、価値をどう伝えていくか。日本中を訪ね歩き、館の関係者の皆様の想いに直接触れる身として、2020年代の幕開けも、10年前と同じ「ミュージアムの将来」への思案から始まりました。今は遠い2030年の元旦も同じことを考えるのだろうな…と苦笑いしながら。